

## 荻野吟子賞受賞者

回数	受賞年度	氏名	業績内容	氏名	業績内容
1	昭58	大村ひさゑ (東女医大)	日本女医会再発足に身を挺して尽力された。	川那部喜美子 (関西医大)	日本女医会再発足に身を挺して尽力された。
2	昭59	該当者なし			
3	昭60	荒川 あや (東女医大)	日本女医会に吉岡弥生賞の設立を提案。これを推進し賞の基金として私財を本会に寄付された。	小俣喜久子 (東邦大医)	三同窓会の中の鶴風会代表の一人として日本女医会再建に向けて努力された。
4	昭61	香川 綾 (東女医大)	日本初の大学院を併設する「女子栄養大学」を開設し、科学に基盤をおく栄養の普及とその実践に対する情熱は国民の健康増進に大いなる影響を与えた。		
5	昭62	該当者なし			
6	昭63	宮崎 安子 (東女医大)	小児科医としての使命感と深い人類愛にその一身を捧げ、特に医療に恵まれないアジアの国々の子供達への医療活動に挺身された。		
7	平1	小野 春生 (東女医大)	国際女医会の役員として活躍され、特に国際会長に就任し、第15回国際女医会議を開催され、日本女医会を広く世界に顕示された。		
8	平2	該当者なし			
9	平3	岩崎和佳子 (関西医大)	十余年の長年にわたり民間国際交流につとめると共に医療関係者、一般市民の協力を得て「バヌアツ共和国に医療を送る会」を設立、ボランティアとして現地の眼科医療に毎年奉仕をされている等、国際医療活動に尽力、貢献されている。	加藤 竺子 (東邦大医)	長年福岡市の衛生行政に携わり、公衆衛生就中母子保健乳幼児健診事業の拡充に多大の功績をあげられる。またいち早く高齢化社会に対応した福祉施策の推進に貢献された。また全国政令都市初の女性助役に就任、女性の地位向上に寄与され、女医の評価を高揚された。
10	平4	今野 タイ (東女医大)	北海道最北端の地、佐呂間町の厳しい環境の許に昭和18年以来50年の長きにわたり診療に従事し、地域住民の疾病予防健康増進及び治療に情熱を注いで来られる。50年間の僻地医療に貢献された献身と努力を高く評価する。		

回数	受賞年度	氏名	業績内容	氏名	業績内容
11	平5	唐澤 寿 (東女医大)	93才の今日に至るまで現役として診療に従事してこられた。昭和25年第1回産業医コンサルタント国家試験に合格し、産業医第1号となり診療に従事すると共に、環境衛生管理につとめた。その上、先見の明をもって喫煙の害をいち早く説き、灰皿の設置を禁止するなど大きな成果をあげられた。なお、女性の地位向上のため日本女性同盟を結成、会長として広く社会活動が続けてきた。女医並びに女性の先駆者としての活動に対し深甚なる敬意を表す。	養老 静江 (東女医大)	今日まで70余年に亘り地域住民の敬愛と信頼を受けて93歳の今日尚診療を続けておられる。その強い責任感と情熱の生活は後輩にとっても大きな励みである。
12	平6	山田多佳子 (東女医大)	昭和54年東京女子医科大学を卒業後、新生児医療の研修に専念される中、発展途上国の恵まれない環境にある子供達の健康を支援するため国立国際医療センター国際医療協力局派遣協力課に赴任、気候、生活条件著しく困難な状況の世界各地において各種保健医療プロジェクトに参加。新生児保育、治療技術の指導に献身努力され、その活躍は現地医師に深い感銘を与えると共に日本医療団からも高い評価を受けている。		
13	平7	該当者なし			
14	平8	佐分 妙 (東女医大)	昭和30年より整形外科医として肢体不自由児の療育に専念するとともに昭和40年日本女医会愛知県支部活動として「婦人と子供の健康を相談する会」を発足させ、以来30年余その中心となって推進。その活動は地域より多大の評価を得ている。		
15	平9	小林 梅子 (東女医大)	山梨県保健所初代女性所長として46年間の長きにわたり住民の健康管理の総括責任者として予防医学を実践し、保健所活動の基礎を築いた。更に女性の労働環境の改善や管理職ポストの確保など女性の地位の向上に尽力した。	南里 栄子 (東女医大)	1939年東京女子医学専門学校を卒業後産婦人科医として地域医療・社会教育及び社会福祉、特に母性保護を中心に衛生教育・母子保健指導などに多大な貢献をされた。又昨年は高齢者のための施設を開設され社会への奉仕活動もしている。

回数	受賞年度	氏名	業績内容	氏名	業績内容
16	平10	須藤 昭子 (関西医大)	1949年大阪女子高等医学専門学校を卒業後、1953年クリストロア宣教修道会に入会し、結核撲滅のため意欲的に活動した。1976年からは世界最貧国の一つであるハイチ共和国においての結核患者および癩患者救済のため孤軍奮闘している。この社会、経済的情勢の厳しいハイチ共和国での献身的医療および救済活動に対する受賞。		
17	平11	該当者なし			
18	平12	中沢 由美 (京都大医)	小児科学を専攻し特に小児心身症の園芸療法について研究・実践され登校児摂食障害児対策に大きな成果を挙げた。神経発達外来や学童思春期外来での診療の傍ら種々な教育講座などの講演を通しての地道な活動に対する受賞。		
19	平13	安藤まさ子 (東邦大医)	戦後まもなく地域保健事業のパイオニアとして活躍、東京小児療育病院の設立運営に参画、西洋医学に満足せず東洋医学も研鑽され、更に視覚障害者や高齢者の医療アドバイザーとして活躍している。この広範囲な医療活動並びに社会活動に対する受賞。	稲葉美佐子 (東女医大)	昭和16年に医学専門学校を卒業以来、保健活動に従事、医院開業後も終始学校保健に尽力され、ヘルスカウンセリング学会・千葉県支部を設立し、特に小児のカウンセリングに多大な貢献をした。この学校保健教育並びに社会活動に対する受賞。
		亀崎 善江 (東邦大医)	昭和18年に医学部専門学校を卒業以来カトリック信者として貧困者治療に従事、平成3年からは東ティモールでの医療奉仕活動を続けている。この永年に亘る貧困者への献身的医療活動並びに国際的医療活動に対する受賞。		
平14～17年(20～23回) なし					
24	平18	稲生 襄 (東女医大)	昭和15年に東京女子医専を卒業し、同大学の小児科医局に入局した。以来今日まで、小児科・内科として診療に従事する傍ら、学校医・保育園園医などを勤めるなど、地域医療に貢献した。また、日本女医会神奈川支部長、日本女医会理事として後進の指導に当たってきた。		

回数	受賞年度	氏名	業績内容	氏名	業績内容
25	平19	吉本 ミチ (東女医大)	東京女子医学専門学校を卒業後、北海道大学眼科医局に入局し、その後、秋田で眼科診療を始め、以来70年余、現在も眼科医として地域に多大な貢献をした。長年に亘る活躍に対しての受賞。	緒方 文江 (関西医大)	関西医科大学を卒業後、長崎大学医学部細菌学教室、その後、長崎大学小児科教室に入局。昭和46年には佐賀県で白石保養院、日見中央病院を開設し地域医療に多大な貢献をした。その傍ら私財を投じて青少年のスポーツ育成に力を注がれた。その幅広い活躍に対しての受賞。
26	平20	該当者なし			
27	平21	石岡 弘子	東邦大学医学部を卒業後、弘前大学医学部大学院で研鑽。臨床医学における精神と身体に関わりに関心を持ちスイスに留学し、ユング派分析家資格を取得。帰国後開設したクリニックで絵画療法、絶食療法などを駆使し地域医療に貢献。その社会的活動に対しての受賞。	大野 照子	東京女子医学専門学校を卒業後、小児科を専攻。地域医療と乳幼児健診等の母子保健事業に尽力した。教育会では栃木県教育委員長として地域に貢献した。第43回日本女医会総会の宇都宮市開催に際し多大な尽力をした。長年に亘る地域医療と社会教育、日本女医会への貢献に対しての受賞。
		菅野 喜興	東京女子医学専門学校を卒業後、精神科を専攻し、昭和35年宮城県塩竈市に菅野愛生会緑が丘病院を設立し、ここで精神科医療を行うと共に若者の心の悩み高齢化に伴う諸問題に取り組んだ。長年に亘る地域医療と幅広い社会活動に対しての受賞。		
28	平22	上野 壽子	昭和18年大阪女子高等医学専門学校卒業後、宇都宮市に上野医院を開設。内科医として活躍すると共に学校医、園医、産業医として地域医療に貢献し、宇都宮市市政功労表彰、宇都宮市長表彰、栃木県公衆衛生大会長表彰を受賞。さらに日本女医会予備評議員として本会の発展に貢献するなど、長年の地域医療と社会活動に対しての受賞。	清水五百子	昭和13年東京女子医学専門学校卒業後、東北大学細菌学教室で研究の後、武蔵野市に清水内科医院を開設。以来93歳まで地域医療に邁進し、その貢献に対し平成22年日本臨床内科学会地域功労賞が授与された。さらに日本女医会東京都下東支部長、東京都支部連合会監事として本会の発展に大いに貢献した。長年の地域医療と社会活動に対する賞。
29	平23	該当者なし			

回数	受賞年度	氏名	業績内容	氏名	業績内容
30	平24	加藤治子	昭和49年大阪市立大学医学部を卒業後大阪大学医学部産婦人科を経て、昭和50年阪南中央病院産婦人科に就職。以来社会的ハイリスク妊産婦支援を続け、平成21年「女性の安全と医療支援ネットワーク」準備室を創設。平成22年には、全国に先駆けて「性暴力救援センター（通称SACHICO）」を院内に開設し、性暴力対応ワンストップセンターとして24時間体制で性暴力被害者救済にあたっていることに對する賞。		
31	平25	該当者なし			
32	平26	長柄光子	昭和49年東京女子医科大学を卒業後、麻酔科医として勤務の後病院や特別養護老人ホーム・知的障害者通所授産施設などの経営に当たり、長年地域に根差した医療と福祉に貢献した。		
33	平27	野崎 京子	京都大学を卒業の後、麻酔科を専攻、三十余年の長きに亘り第一線の麻酔医として活躍、住友病院麻酔科部長、中央手術室部長を経て、平成八年ご退職。平成九年から豊中市にて麻酔科、心療内科、精神科を標榜したクリニックを開設し、疼痛や心の病を持った方々の診療に専心、地域での活躍に対し日本臨床内科医会地域功労賞を授与された。また、大阪府女医会、日本女医会大阪支部の役員も務め地域に多大な貢献を行っている。		
34	平28	村田 郁	昭和34年に昭和大学医学部を卒業後、皮膚科学と小児科学の臨床現場で研鑽を積み、昭和44年には村田医院を開設。48年にわたり地域医療に貢献した。昭和52年以降は地元小学校の学校医、埼玉県志木市内の複数の保育園医、障害児の健康管理医師などを務めたほか、埼玉県女性医師復職支援センターの設立にも尽力。復職時の研修調整、就業後の相談窓口、育児・介護支援など、県内の女性医師を支援も行った。		